第49回
北海道特別活動研究会

オホーツク・北見大会

オンライン
での開催

令和3年10月16日(土)

主催　北海道特別活動研究会
主管　オホーツク管内
特別活動研究会

多様な他者と協働し、集団や社会に
参画する力を高める特別活動

目　次

◇ご挨拶　北海道特別活動研究会会長　北　原　徹　也　……　1

◇ご挨拶　オホーツク・北見大会運営委員長　保　科　浩　則　……　2

《開催要項》

○第４９回北海道特別活動研究会オホーツク・北見大会開催要項　……　3

○大会運営委員会役員、開催地運営委員会　…………………………　4

《研究主題とその解説》

○第１８次研究主題、目指す児童・生徒像、大会課題、研究の視点……　5

○第１８次研究の研究構造図　………………………………………　１７

○基調提言

　第Ⅰ分科会（小学校学級活動部会）　…………………………………　１８

　第Ⅱ分科会（中学校学級活動部会）　…………………………………　１９

　第Ⅲ分科会（小中合同児童会・生徒会、クラブ活動部会）　………　２０

　第Ⅳ分科会（小中合同学校行事、全体計画部会）　………………　２１

《分科会提言》

○第Ⅰ分科会（小学校学級活動部会）　…………………………………　２２

○第Ⅱ分科会（中学校学級活動部会）　…………………………………　２３

○第Ⅲ分科会（小中合同児童会・生徒会、クラブ活動部会）　…………　２４

○第Ⅳ分科会（小中合同学校行事、全体計画部会）　…………………　２６

《北海道特別活動研究会事務局だより》

○令和３年度北海道特別活動研究会役員名簿　……………………　２８

○令和３年度北海道特別活動研究会事務局名簿　……………………　２９

○令和３年度北海道特別活動研究会支部役員名簿　…………………　３０

○開催地及び研究主題一覧　……………………　３１

○北海道特別活動研究会規約　……………………　３３

「夢」をもつ子どもを育てる特別活動の重要性

北海道特別活動研究会
会　長　　北　原　徹　也

コロナ禍のためオンラインでの開催となりますが、『第４９回北海道特別活動研究会オホーツク・北見大会』を開催できますことを大変うれしく思います。

本会の研究大会は、昭和４８年の第１回大会から今年で４９回目を迎えますが、昨年度は残念なことにコロナ禍のため札幌大会を中止せざるを得ませんでした。今年度は、オホーツク支部が「コロナ禍でもこうすればできる」と開催方法を工夫して、新たな形での研究大会をつくり出してくださいました。開催に向けてご尽力いただきました大会関係者の方々に改めてお礼を申し上げます。

さて、東京オリンピックをＴＶ放送でご覧になった方が多いのではないかと思います。世界中のあらゆる競技の選手が活躍する姿に、たくさんの感動をもらいました。数えきれない人の思いと「夢」が詰まった場所が、オリンピックという舞台だと感じました。しかし、誰もがこの舞台に立てるわけではありません。あと一歩のところで涙を飲んだ選手の方が圧倒的に多いのです。

では、オリンピック出場を掴んだ選手とそうでない選手とは何が違うのでしょうか。才能でしょうか。それとも練習量でしょうか。「運だ」と言う人もいるかもしれません。私は、オリンピック出場の切符を掴んだ人たちは皆「信じ抜く力」が他の人より強かったのだと思います。「夢」を信じ抜く力、「可能性」を信じ抜く力です。きっと夢をもち、その実現に向けて人一倍努力し、「自分自身」を信じ抜いたのだと思います。夢をもつことは、目的をもって生きていく上で大切なことです。夢をもつことによって、自分がこれから進んでいく方向を意識し、自分がやるべきことがはっきりします。

昨年度よりキャリア・パスポートの取組が始まっていますが、「夢をもつ」「なりたい自分に近付くために努力する」ことにつながる大切な取組です。キャリア教育の要として位置付いている特別活動が果たす役割は大きいと考えます。

北海道特別活動研究会は、第１８次研究主題を「多様な他者と協働し、集団や社会に参画する力を高める特別活動」として研究を進めています。今大会は、４か年研究の３年目にあたります。オンラインでの研究討議とはなりますが、これまでの研究成果を踏まえ、特別活動の重要性を力強く発信していく大会となると確信しております。

最後になりましたが、本大会の開催にあたりましてご支援をいただきました北海道教育委員会、オホーツク教育局、北見市教育委員会、ご講演を賜ります文部科学省初等中等教育局教育課程課教科調査官　安部　恭子様をはじめ、各関係機関の皆様に厚くお礼申し上げます。また、ご提言やご助言をいただく先生方に重ねて感謝申し上げ、ご挨拶といたします。

知恵を出して～前向きに～

第４９回北海道特別活動研究会オホーツク・北見大会
運営委員長　　保　科　浩　則

北海道に３回目の緊急事態宣言が発令された８月末、１５００通を超える本研究大会の案内状発送作業です。会員の集合を避け、必要最小限の人数４名による作業が黙々と進む中、タブレットからは、リモート研究部会の熱心な声が響いてきます。宣言発令により、研究発表準備を修正しなくてはならなくなってしまったのです。研究部会は、発送作業と同じ３時間半、休むことなく続いていました。視点を変えますと、「案内発送作業は４人で３時間半あればできる」ということに気付く機会にもなりました。

第４９回北海道特別活動研究会オホーツク・北見大会は、オホーツク管内特別活動研究会にとりまして、コロナ禍でも「学びを止めない」新しい研究大会様式へのチャレンジという貴重な機会となりました。本研究大会に心を寄せ、ご参加くださいました皆様に深く感謝申し上げます。

４年前、オホーツク・網走大会を終えた直後の本会に、北海道特別活動研究会事務局から、第４９回大会開催のお話をいただきました。「準備は大変だけれど、貴重な経験になるのでやってみたい！」「自分たちの実践を発信し、意見をもらうことで、さらに実践を深めたい！」･･･。オホーツクの若き実践家たちのエネルギーに満ちた意見が集まり、本大会に向けた準備がスタートしました。以来、月に１回の研究部例会、半年に１回の実践発表交流会など、精力的に実践研究を積み重ねてきた研究部の姿が、私の瞼に浮かんでまいります。

そしてコロナ禍・・・。ご参加の皆様も本会と同様に、感染拡大状況の変化への対応に日々ご苦労されながら、本日ご出席いただいていることと存じます。

８月末の研究部会後、会員に配信された研究部長のメールには「なかなか自由の利かない中での全道大会ですので、どこまでよい状態のパフォーマンスが見せられるかは分かりませんが、授業におきましては研究部一同、知恵を出して進めていきます。」とありました。頼もしい限りです。ご参加の皆様のご意見・ご感想等が、本会の「明日への一歩」となりますので、どうぞよろしくお願い申し上げます。

結びになりますが、ご後援を賜りました、北海道教育委員会、オホーツク管内教育委員会協議会、北見市教育委員会をはじめ、関係機関の皆様、当日の公開授業は叶いませんでしたが、授業会場として全面的にご協力いただきました北見市立東小学校の皆様に深く感謝申し上げ、会を代表してのご挨拶とさせていただきます。

第４９回北海道特別活動研究会 オホーツク・北見大会開催要項

Ⅰ 主催　　北海道特別活動研究会

Ⅱ 主管　　オホーツク管内特別活動研究会

Ⅲ 後援　　北海道教育委員会 オホーツク管内教育委員会協議会 北見市教育委員会
北海道小学校長会 北海道中学校長会 北海道公立学校教頭会 オホーツク管内校長会
オホーツク管内教頭会 北見市校長会 北見市教頭会 全国特別活動研究会

Ⅳ 研究主題及び大会主題

研究主題『多様な他者と協働し、集団や社会に参画する力を高める特別活動』
大会課題『互いのよさや可能性を発揮しながら、多様な他者と協働する楽しさを実感できる集団活動を求めて』

Ⅴ 期日と開催方法　　令和３年１０月１６日（土）オンライン【Zoom】

Ⅵ 日程

8:45	9:00	9:15	10:00	11:00	12:15
入室	開会式	授業協議	講演会	分科会	閉会

【開会式】９：００～９：１５

１　大会長挨拶　　北海道特別活動研究会会長　　北 原 徹 也
２　運営委員長挨拶　　オホーツク・北見大会運営委員長　　保 科 浩 則
３　研究発表　　北海道特別活動研究会研究部長　　髙 橋 慶 之

【授業協議】９：１５～１０：００

発表者	内　容
松 岡 舞	北見市立東小学校３年竹組 学級活動（１）「３年竹組をレベルアップさせよう」
神 山 達 郎	北見市立東小学校５年松組 学級活動（１）「絆深化集会をしよう」

【講演会】１０：００～１１：００

○　演題　「多様な人々と協働してよりよく生きる力を育む特別活動 ～コロナ禍だからこそ求められる特別活動の豊かな実践～」
○　講師　安 部 恭 子 氏
（文部科学省初等中等教育局教育課程課教科調査官、国立教育政策研究所教育課程研究センター教育課程調査官）

【分科会】１１：００～１２：１５

分科会名	提言者	助言者	司会者	運営者
第Ⅰ分科会 学級活動部会 （小）	佐藤　宏 （網走市立南小学校）	神田　秀樹 （大空町立女満別小学校教頭） 鈴木　康宏 （士別市立士別南小学校長）	亀島　秀元 （旭川市立旭川小学校）	遠藤　環希 （紋別市立紋別小学校） 木村　圭介 （札幌市立手稲山口小学校）
第Ⅱ分科会 学級活動部会 （中）	髙神　真由 （函館市立亀田中学校）	深澤　昌明 （函館市立磨光小学校長） 志田　雅人 （豊富町立兜沼小中学校教頭）	桑原　麻衣 （札幌市立桑園小学校）	横地　顕広 （網走市立第一中学校） 石岡　真治 （札幌市立新琴似西小学校）
第Ⅲ分科会 児童会･生徒会 ・クラブ活動 部会	竹内　明生 （厚岸町立真龍小学校） 小森　敬宗 （大空町立女満別中学校）	二瓶　明紀 （釧路市立新陽小学校長） 伊藤　勝 （北見市立光西中学校長）	平野　清也 （留萌市立留萌小学校）	河合　建弥 （佐呂間町立佐呂間小学校） 三浦　綾乃 （札幌市立本通小学校）
第Ⅳ分科会 学校行事･全体 計画部会	金井　建憲 （小樽市立山の手小学校） 笹井　賢一 （札幌市立簾舞中学校）	日下部　匡彦 （小樽市立山の手小学校長） 小村　淳 （札幌市立簾舞中学校長）	縣　宏光 （登別市鷲別中学校）	貝沼　美智 （興部町立沙留小学校） 福本　勇太 （札幌市立北九条小学校）

第４９回北海道特別活動研究会　オホーツク･北見大会運営委員会役員

【大会顧問】　濱　田　美　樹（第２２代会長）　　津　島　髙　明（第２４代会長）
　　　　　　佐々木　晃一郎（第２６代会長）　　加　藤　佳　栄（第２７代会長）
　　　　　　宮　原　伸　子（第２８代会長）　　高　橋　正　行（第２９代会長）

【大 会 長】　北海道特別活動研究会会長　　北　原　徹　也（札幌市立平岸西小学校長）

【副大会長】
北海道特別活動研究会副会長　　山　本　祐　司（札幌市立新陵東小学校長）
北海道特別活動研究会副会長　　山　下　尊　子（札幌市立菊水小学校長）
北海道特別活動研究会副会長　　小　田　英　人（札幌市立大倉山小学校長）
道南地区特別活動研究会会長　　深　澤　昌　明（函館市立磨光小学校長）
胆振地区特別活動研究会会長　　高　見　恭　介（室蘭市立翔陽中学校長）
釧路地方特別活動研究会会長　　二　瓶　明　紀（釧路市立新陽小学校長）
後志･小樽特別活動研究会会長　　日下部　匡　彦（小樽市立山の手小学校長）
日高地区特別活動研究会会長　　神　成　　　浩（新ひだか町立静内中学校長）
留萌地区特別活動研究会会長　　石　田　正　樹（留萌市立留萌小学校長）
上川･旭川特別活動研究会会長　　佐　藤　聖　士（旭川市立緑新小学校長）
空知地区特別活動研究会会長　　橋　本　展　晴（滝川市教育委員会指導参事）
宗谷地区特別活動研究会会長　　志　田　雅　人（豊富町立兜沼小中学校教頭）

第４９回北海道特別活動研究会　オホーツク･北見大会開催地運営委員会

【運営委員長】　オホーツク管内特別活動研究会会長　　保　科　浩　則（遠軽町立安国小学校長）

【運営副委員長】　オホーツク管内特別活動研究会副会長
飛　澤　浩　幸（斜里町立斜里中学校長）
上　野　弘　一（訓子府町立訓子府中学校長）
澁　谷　　　順（湧別町立上湧別中学校長）
齊　當　あけみ（紋別市立紋別小学校教頭）
神　田　秀　樹（大空町立女満別小学校教頭）

【事務局長】　オホーツク管内特別活動研究会事務局長　　小　中　理　司（北見市立美山小学校教頭）

【事務局次長】　オホーツク管内特別活動研究会事務局次長　　鍋　城　征　爾（遠軽町立南小学校教諭）

【研究部長】　オホーツク管内特別活動研究会研究部長　　佐　藤　　　宏（網走市立南小学校教諭）

【研究副部長】　オホーツク管内特別活動研究会研究副部長
矢　野　　　紘（滝上町立滝上小学校教諭）
横　地　顕　広（網走市立第一中学校教諭）

【授業協議サポートチーム】

班	氏名	所属	班	氏名	所属
松岡班	佐藤　　宏	網走市立南小学校教諭	神山班	矢野　　紘	滝上町立滝上小学校教諭
	高橋　拓也	網走市立潮見小学校教諭		鍋城　征爾	遠軽町立南小学校教諭
	篠原　諒伍	斜里町立朝日小学校教諭		西村　亮子	湧別町立湧別小学校教諭
	河合　建弥	佐呂間町立佐呂間小学校教諭		貝沼　美智	興部町立沙留小学校教諭
	國嶋　朝生	湧別町立湧別小学校教諭		遠藤　環希	紋別市立紋別小学校教諭
	澁谷　智史	滝上町立滝上小学校教諭		吉村倖一郎	紋別市立紋別小学校教諭
				上元　　創	雄武町立雄武小学校教諭

第49回北海道特別活動研究会　オホーツク・北見大会　研究主題解説

多様な他者と協働し、集団や社会に参画する力を高める特別活動

北海道特別活動研究会　研究部

１　研究主題、目指す児童・生徒像、大会課題

（１）研究主題の解説

これからの時代を生き抜く子どもたちに求められる力

グローバル化や高度情報化、少子高齢化、人工知能の発達による機械化・自動化による産業構造の変化など、これからの子どもたちは社会が大きく変化していく時代を生き抜いていくことになります。そのように複雑な社会を生きる子どもたちには、社会に主体的に関わり、自ら課題を見付け、解決していく力や、様々な価値観をもつ他者との関わりの中で、多様な考えを認め合いながら協働する力、さらには、自分と他者を共に尊重し、夢や希望をもって生きる力を育むことがより一層求められています。

平成 31 年度　全国学力・学習状況調査の児童生徒質問紙には、以下のような結果が示されています。

○H31 年度　全国学力・学習状況調査　児童生徒質問紙より

・「あなたの学級では、学級生活をよりよくするために学級会で話し合い、互いの意見のよさを生かして解決方法を決めていると思いますか。」

【小学校】	国語	当てはまる（６７．６%）	当てはまらない（５３．７%）
	算数	当てはまる（６９．１%）	当てはまらない（５９．２%）
【中学校】	国語	当てはまる（７４．４%）	当てはまらない（６８．５%）
	算数	当てはまる（６１．９%）	当てはまらない（５６．０%）
	英語	当てはまる（５８．１%）	当てはまらない（５２．１%）

・「学級みんなで話し合って決めたことなどに協力して取り組み、うれしかったことがありますか」

【小学校】	国語	当てはまる（６６．３%）	当てはまらない（５３．９%）
	算数	当てはまる（６８．３%）	当てはまらない（５９．１%）
【中学校】	国語	当てはまる（７５．３%）	当てはまらない（６６．７%）
	算数	当てはまる（６２．４%）	当てはまらない（５３．９%）
	英語	当てはまる（５７．６%）	当てはまらない（５３．８%）

※（　）内の数値は正答率

話合い活動を通して合意形成を図り、決めたことをみんなで協力してやり遂げることに喜びを感じている児童生徒は、教科の正答率が高くなっています。特別活動の特質である自分たちで課題を見付け、仲間と共に意見を出し合いながら、主体的に課題を解決していく力は、他の教科・領域の学びに生かされていることが分かります。また、見方・考え方の異なる仲間とも折り合いをつけて、共に力を合わせて活動をやり遂げる体験を積み重ねていくことの必要性も感じられます。

特別活動は、「集団活動」と「実践的な活動」を特質としています。学級や学校における集団活動は、目標を達成するための方法や手段を全員で考え、共通の目標を目指し、協力して実践していくものです。児童生徒がよりよい学級や学校生活を目指し、自分たちの力で諸問題の解決に向けて具体的な活動を積み上げていくことが実践力の高まりにつながります。したがって、子どもたちの活動は、児童生徒の発意・発想が生かされ、自主的、実践的な活動であることが大切です。教師の意図的、計画的な指導と

ともに、児童生徒の主体的な取組になるような活動を構成していく必要があります。
　また、特別活動の特質は、課題を見いだし解決に向けて取り組む実践的活動であるということや、各教科等で学んだことを実際の生活において総合的に活用して実践できるということにあります。今回の学習指導要領では、「集団や社会の形成者としての見方・考え方」を働かせることが述べられています。それは、「各教科等の見方・考え方を総合的に働かせながら、自己及び集団や社会の問題を捉え、よりよい人間関係の形成、よりよい集団生活の構築や社会への参画及び自己の実現に向けた実践に結び付けること」と示されています。一連の活動の過程で、多様な他者と協働できる場を教師が意図的に設定していくことによって、特別活動の特質に応じた見方・考え方を働かせる子どもたちの姿を生んでいくことが求められます。

　このような時代背景や学習指導要領の改訂を踏まえて、研究主題を**「多様な他者と協働し、集団や社会に参画する力を高める特別活動」**と設定しました。

多様な他者と協働し

「多様な他者と協働し」とは、「様々な人との関わりを通して、共によりよい学級･学校生活づくりに力を合わせて活動すること」と押さえます。
　学校生活の中には、学級・学年の仲間や異年齢の児童生徒など、自分とは見方・考え方が異なる人との関わりが多く存在します。様々な価値観をもつ仲間と共に活動をつくり上げるには、互いの考え方のよさや違いを認め合うことや、互いのよさを理解したうえで新たな価値を見いだしていくことが大切です。集団活動の目標の実現に向けて、他者との違いを生かし合いながら、折り合いをつけて課題を解決できる力を高めていきます。

集団や社会に参画する力を高める

「集団や社会に参画する力を高める」とは、「よりよい学級・学校生活づくりに自ら進んで取り組み、様々な問題を主体的に解決しようとする力を高めること」と押さえます。
　「なすことによって学ぶ」を方法原理としている特別活動では、自分たちで課題を発見し、その課題に向けて解決方法を話し合い、合意形成や意思決定したことを実践して、振り返るといった一連の活動の流れを繰り返すことが大切です。自分一人ではできないけれど、仲間と一緒に取り組むことで課題を解決できたという達成感は、次の活動意欲を生み出します。また、成功体験の積み上げが「自分たちの手で、自分たちの学級・学校生活をよりよいものにしている」という手ごたえに繋がっていきます。仲間と共に学級や学校をよりよくしようと活動に取り組むことで、子どもたち一人一人に社会参画に資する力を育んでいきたいと考えます。

　今研究では、様々な価値観をもつ仲間と協働しながら主体的に課題の解決に取り組むことによって、社会参画に資する力を高めていきたいと考えます。活動をつくり上げる過程で、自分と他者のよさや可能性に気付き、互いに認め合うことによって、個々の自己有用感を高めることができます。そして、自分はかけがえのない存在であると自尊感情を高めることが、自己実現へ向かう子どもたちのエネルギーにつながります。私たちは、このような特別活動を目指し、実践を通して、研究主題の具現化を図っていきます。

（２）目指す児童・生徒像

よりよい人間関係を築く力を高め、自己の生き方についての考えを深めていく子

研究主題の実現に向けて、児童・生徒像を「**よりよい人間関係を築く力を高め、自己の生き方についての考えを深めていく子**」と設定しました。

よりよい人間関係を築く力を高め

「**よりよい人間関係を築く力を高め**」とは、人間関係形成に資する力を育むことです。

特別活動は、学校の内外で、多様な他者と関わり合う機会が豊富にあります。様々な集団活動を通して、多様な他者のよさを認め合う力を高めていくことにより、集団が変わっても誰とでも互いのよさを生かし合えるような人間関係を築くことのできる子の育成を目指します。中でも学級の集団づくりは学びに向かう集団の基盤となります。子どもたち一人一人のよさや可能性を生かすと同時に、他者の失敗や短所に寛容で共感的な学級の雰囲気を醸成していくことが大切です。そのような集団では、協力して活動したり、話合いで委縮することなく自分の意見を発言し合ったり、安心して学習に取り組んだりすることを可能にします。また、児童会・生徒会活動、クラブ活動、学校行事において、異年齢の他者と共に活動することにより、人間関係をより広げていくことができます。異なる意見や考えを生かし、様々な解決の方法を模索したり、折り合いを付けたりすることで、互いのよさや可能性を発揮し合いながら活動をつくり上げる児童生徒を育成していきます。

自己の生き方についての考えを深めていく

「**自己の生き方についての考えを深めていく**」とは、自己実現に資する力を育むことです。

集団活動の目標の実現に向けて、共に活動を展開していくことにより、他者のよさに触れることができます。その過程で、相手だけではなく、自己への理解を深め、自己のよさや可能性を生かす力、自己の在り方や生き方を考えていく力を育んでいきたいと考えます。集団活動の目標の実現に向けて粘り強く取り組み、活動をやり遂げることによって、自己の成長や自己有用感の高まりを子どもたち自身が実感できると考えます。自己実現に向け、自分だけではなく、仲間と共によりよく成長し合う児童生徒の育成を目指します。

（３）大会課題

令和元年度　函館・渡島大会（全国）

互いのよさを認め合いながら、共に活動をつくる楽しさを実感できる集団活動を求めて

令和２年度　札幌大会（開催中止）

互いのよさや可能性を発揮しながら、多様な他者と協働する楽しさを実感できる集団活動を求めて

令和３年度　オホーツク・北見大会

互いのよさや可能性を発揮しながら、多様な他者と協働する楽しさを実感できる集団活動を求めて

令和４年度　札幌大会

互いのよさや可能性を発揮し、生かし合いながら、主体的に参画する楽しさを実感できる集団活動を求めて

２　研究の視点に関わって

視点１
多様な他者と協働できる活動構成

＜函館・渡島大会　各分科会の提言、札幌大会に向けた取組より＞

〇話合い活動や実践活動の成果と課題を可視化することによって、集団の成長や自分たちが次に目指す姿を具体的にイメージすることができる。

〇年間指導計画に基づいて一連の活動を系統立てて積み上げることによって、児童生徒に育成すべき資質・能力が身に付いていく。

〇よりよい生活づくりに向けて主体的に活動をつくりあげていくためには、集団活動の目標を共有化し、教師が事前に児童生徒の意識を耕していくことが大切である。

〇児童生徒が主体的につくり上げる児童会・生徒会活動や学校行事を目指して、教職員も目指す姿を共有し、評価方法を工夫して成果を蓄積していくことが、個や集団の成長の実感につながる。また、学校の枠を超えて、地域の取組へと広げることによって、子どもたちの活動の幅が広がり、より主体的な学びに高めていくことができる。

〇特別活動を軸としながら、他の教科・領域と関連付けた全体計画を活用することによって、児童生徒の学校や地域への所属意識を高めることができる。

＜視点1のポイント＞
①目的意識と役割意識の明確化~集団活動の目標を共有化～
②互いのよさや可能性を発揮
③特別活動の内容相互の関連
④特別活動と各教科等との往還

目的意識と役割意識の明確化～集団活動の目標を共有化～

子どもたちが多様な他者と協働しながら、自主的、実践的に活動に取り組むためには、集団の一人一人が目的意識と役割意識を明確にして活動に取り組んでいくことが大切です。

□目的意識…事前に活動のねらいや集団の目指す姿を確認し、個々の意識のずれを共感的に理解し合いながら、集団が同じ目的に向かって活動していこうという集団活動の目標を共有することが重要です。子どもたちは、目的意識をもつと自分は何をすべきなのかを考えて行動し、自己実現に向かう意欲を高めていくことができます。

□役割意識…目標を実現するために、自分はどのようなことをするのか、自分の役割をもたせます。一人一人が役割意識を高め、主体的に活動していくためにも、集団活動の目標を共有することが大切です。共通の目的意識をもち、それを達成するための自分の役割が明確になることによって、より主体的に実践活動に取り組むことができるからです。

自分とは異なる見方・考え方、価値観をもつ多様な他者と共に活動をつくり上げるには、**集団活動の目標を共有すること**が大切です。自分たちの目指す姿や活動のねらいを共有し、それを実現したいと強い願いをもつことによって、互いの考え方のよさや違いを受け入れて、認め合おうとする子どもたちの姿が生まれます。そして、多様な他者との違いを生かし合いながら、折り合いをつけて課題を解決する力を高めていくことができると考えます。

また、集団活動の目標をより具体的に共有することによって、一人一人の目的意識・役割意識が明確になり、より主体的に取り組む子どもたちの姿が生まれていくと考えられます。「自分の」「自分たちの」目指す姿を具体的にイメージし続け、自己の成長を実感できるような活動を展開することによって、一人一人の生活や人間関係を築く力、集団の実践力の高まりにつなげていきたいと考えます。

そのような主体的な子どもたちの姿を生み出すためには、「内発的動機付け」により、事前に子どもたちの「やってみたい」という意欲を高めておくことが大切です。取り組み方に応じて、教師は子どもに活動の理由や意味を問うたり、計画などを差し戻したりと、安易な思いでは計画・実行に移すことができない経験をするように関わることが大切です。そうすることで、子どもの手によって活動が具体的に企画・立案され、活動の目的も明確になり、集団全体で目的意識を共有していくことができると考えます。事前の子どもたちの意識の耕しの場を大切にしていきます。

互いのよさや可能性の発揮

特別活動は、様々な集団での活動を基本としています。そこで大切なのは、他者に迎合することでも、相手の意見を無理にねじ伏せることでもありません。同調圧力に流されることなく、他者の意見を受け入れながら自分の考えも主張できるようにすることが大切です。異なる意見や考えをもとに、様々な解決の方法を模索したり、折り合いを付けたりすることが、「互いのよさや可能性を発揮しながら」につながります。児童生徒が自由な意見交換を行い、役割分担をして協力するという一連の活動を展開することにより、一人一人の所属感や連帯感を高め、集団の支持的風土を醸成していくことができます。

多様な他者と協働するために、一連の活動の過程で、教師が意図的に他者との関わりが生まれる場を設定し、人間関係の幅を広げていけるような活動を構成していくことが大切です。

特別活動の内容相互の関連

学級活動を基盤としながら、児童会・生徒会活動、クラブ活動、学校行事との関連を図ることにより、子どもたちの実践力をさらに高めていくことができます。各活動において身に付けた力が相互に生かされ、学級や学校の生活づくりに参画する態度や自治的能力が一層身に付くと考えられます。

□学級活動と児童会・生徒会活動、クラブ活動との関連
…子どもたちの活動のアイディアや発想力は学級活動での経験が基盤となります。学級活動で培った創意工夫する力は児童会・生徒会活動、クラブ活動に生かされます。活動を通して、子どもたちは「よりよい学級」から「よりよい学校づくり」の視点で考えることができるようになり、「学校を自分たちの手でよりよくしたい」という思いや活動の幅を広げていくことができます。また、異年齢の他者との関わりも多く、「思いやり」と「あこがれ」の関係を築き、互いに相手意識を高めながら活動する子どもたちの姿が生まれます。

□学級活動と学校行事との関連
…合意形成・意思決定の達成に向けて粘り強く取り組んでいく学級活動の学びを生かします。行事のねらいや集団（学校・学年・学級）の目標を共有し、一人一人が目的意識・役割意識を明確にもって活動することにより、学校行事を「自分たちの力でつくりあげる」という参画意識を高めていくことができます。一連の活動の過程で、子どもたちが自分たちで創意工夫できる場を設定することによって、主体的に活動をつくり上げる姿が生まれます。

計画、実践、振り返り、改善の一連の活動を繰り返すことによって、集団や社会の形成者としての見方･考え方を働かせながら、様々な問題を主体的に解決しようとする力が身に付いていくと考えられます。

□基本的な学習過程の積み上げ
…「なすことによって学ぶ」ことを積み上げることによって「経験」を生かす子どもたちの姿を生み出します。
（例）学級活動（１）での「問題の発見・確認」→「解決方法等の話合い～合意形成～」→「実践～振り返り」の基本的な学習過程の積み上げによって深まる子どもたちの学び
・前回の学級活動での経験を生かす
・振り返りを次の活動に生かす
・合意形成の方法を次の学級会に生かす

※一連の活動を積み上げるためには、活動の時間を保証する必要があります。一連の活動を繰り返すことが、活動の改善や集団の成長へとつながります。

このように、年間を通してバランスがとれた活動を展開していくためには、教師が見通しをもって指導にあたることが大切です。活動構成を計画する際に、子どもたちのそれまでの経験がどのような場面で生かされるのか、子どもたちに新たに身に付けさせたい力は何なのかを事前に考えておく必要があります。そのためにも学級活動年間指導計画に、子どもたちの育ちや教師の意図、各活動との関連を反映し、年間の見通しをもった意図的・計画的な指導を継続して行っていきます。

特別活動と各教科等との往還

「往還」に関しては、２点に配慮して活動構成をします。

□特別活動の学びを各教科等の学びへ
…特別活動は、多様な集団活動を通して、学びに向かう学習集団の基盤を形成します。特別活動の充実によって、各教科等における「主体的・対話的で深い学び」がより充実していきます。
□各教科等の学びを特別活動の学びへ
…各教科等の特質に応じて育まれた資質・能力を、実践的な集団活動を通して、実生活で活用できるようになります。その過程で教科等の見方・考え方をさらに深めることができます。

このように、往還的な関連を教師が意図的に図っていくことで、子どもたちは、どのように活動を進めるとよいのか、取り組み方の見通しをもつことができます。見通しをもち、学んだことを主体的に活用して得た成功経験が子どもたちの自己有用感をさらに高めることにつながっていきます。

以上、４つのポイントを踏まえながら、以下の実践活動から研究の成果を積み重ねていきます。

○集団活動の目標やねらいをもとに、集団や社会の形成者としての見方・考え方を働かせながら、具体的な解決を考えていくことができる話合い活動
○合意形成や意思決定したことを実現するために、自分の行うべきことや、集団活動での自分の役割を自覚しながら取り組むことができる実践活動
○自分の経験や身に付けた力を活かす場が設けられ、それらを活用する力が高まっていく実践活動
○多様な他者との協働を通して、自分の取組に自己有用感を感じ、共に自己実現への意識を高めていく実践活動

視点２
集団や社会に参画する力を高める教師の関わり

＜函館・渡島大会　各分科会の提言、札幌大会に向けた取組より＞

○評価の観点を明確にすることによって、児童生徒は一連の活動を具体的な姿で振り返ることができ、集団への所属意識や個々の自己有用感の高まりにつながる。
○振り返りや相互評価の場を通して、自己や集団の変容を実感することにより、自分や他者のよさを認め合い、よりよい人間関係を形成できる。集団の支持的風土の醸成にもつながる。
○異年齢活動で共に活動をつくり上げる力を高めていくためには、異年齢の他者との関わりが生まれる場を意図的に設定し、「教え・一緒に考え」「認め・励ます」教師の関わりが大切である。
○異年齢の他者との関わりを通して、児童生徒が「思いやり」と「あこがれ」でつながり、個々の実践力や人間関係を形成する力を高めることができる。
○教職員が、学校の重点目標を軸に児童生徒に関わることによって、集団や社会の形成者としての見方・考え方を働かせて活動に取り組む子の育成につながる。

＜視点2のポイント＞
①多様な他者との協働
②様々な集団活動
③集団や自己の生活上の課題の解決～実践活動の積み上げ～
・リーダー・フォロアーの明確化
④自己有用感を高める評価の在り方・教師の関わり

多様な他者との協働

学校生活には、目的や構成が異なる様々な集団での活動があります。多様な他者と協働していくためには、集団が変わっても、自分や他者のよさや可能性に気付いたり、発揮したりすることができるような子を育成していくことが大切です。しかしながら、実際の生活場面を振り返ると、互いの見方・考え方のよさや違いを受け入れることができずに、活動が円滑に進まないことがあります。

様々な集団活動

自分と見方・考え方や価値観が異なる他者と協働していく子を育成していくためには、多様な他者との関わりが生まれる場の設定に加えて、「多様な他者をつなぐ教師の関わり」が必要です。教師の適切な関わりの下、日々の学級・学校での生活づくりに取り組み、互いのよさや違いを受け入れて、認め合う体験を積み上げることによって、多様な他者と協働しながら、人間関係を築く力や集団活動に参画する力を高めていくことができると考えます。

多様な他者をつなぐ関わりとして、３点を大切にしていきます。

□互いの考え方のよさや違いを明らかにする関わり
・互いの考え方のよさや違いを明確にし、互いに共感的に理解しようという意識を高めます。

□課題を焦点化する関わり
・課題を明確にし、課題解決に向けて集団・自己にとって必要なことは何なのかを子どもたちに気付くようにすることによって、課題解決の見通しをもたせます。
□集団活動の目標を明らかにする関わり
・自分たちの目指す姿・集団活動のねらいを問い直すことによって、互いの考え方の違いを乗り越えて共に活動を成功させようという意欲を高めていきます。

教師の適切な関わりの下、活動をつくり上げる体験を積み上げていくと、子どもたち自身が課題を見いだしていく力が高まります。自分たちの現状を理解し、「次にもっとこうなりたい」という思いや願いをもって活動していると、教師から提示された課題だけではなく、子どもたち自身が集団の課題を意識できるように成長していきます。「自分たちで議題をつくり、話し合って解決したい」という思いをもつことが、子どもたちの主体的な学びの基盤になります。自ら課題を見付け、仲間と共に力を合わせて主体的に解決に向かう体験の積み上げが参画する力の素地になっていくと考えます。

集団や自己の生活上の課題の解決～実践活動の積み上げ～

自分たちで見いだした課題解決に向けて主体的に取り組んでいくためには、実践活動を重ねる必要があります。実践活動の時間を十分に確保し、活動をやり遂げて振り返ることによって、成長を子どもたち自身が実感できることが大切です。「何を」、「どのように」、「自分は何をしていくのか」を合意形成・意思決定することにより、一人一人の役割意識を高めることができます。みんなでやり遂げた達成感の積み上げが、一人一人の自己有用感を高め、互いのよさを知り、新たな自分の可能性に気付く機会になると考えます。

実践活動に重点を置くのは、日常生活で高めてきた人間関係形成力を存分に発揮できるのが実践活動であり、話合い活動において共有した思いや願いを実現していく過程で、個々の思いや考え方の違いが生まれてくるのも実践活動だからです。その違いやずれを受け止めながら目標を実現していこうと取り組んでいく過程で、子どもたちは人間関係を築く力や集団活動に参画する力をさらに高めていくことができると考えます。

実践活動においては、２点の関わりを大切にしていきます。

□子どもたちの活動意欲を高める関わり
・集団活動の目標に向けて活動している子どもたちへの価値付け
・認め合いの場の設定
→個・集団の取り組み方のよさの広がり

□問題点を焦点化・課題解決への見通しをもたせる関わり
・個と集団に応じた関わり
・解決への糸口や新たなアイディアの提示
　→自分たちで乗り越える経験の積み上げ

実践活動の過程で、子どもたちが互いのよさや可能性を発揮しながら主体的に活動するために「リーダーとフォロアー」の立場と役割を明確にしていきます。活動においてリーダーは集団のまとめ役として、フォロアーはまとめ役を支えながら取り組む関係をつくり上げていくことが大切です。リーダーとフォロアーは活動ごとに適宜、交代していきます。

リーダーとフォロアーの立場や役割を明確にすると活動中にいくつかの問題場面が出てきます。何が大変だったのか、何をしたから問題を解決できたのか、あるいはどうすべきだったのかを振り返りを通して確認していきます。双方の立場や役割の違いを経験した子どもたちは、リーダーとフォロアーが交代したときに、「リーダーが困らないように、〇〇をしよう。」「フォロアーのために、ここまで計画しておこう。」などといった、互いを尊重する姿勢が生まれます。そうして得た成功経験の積み重ねによって、「次の活動でも自分たちでやってみよう」と、自主的な取組へとつながっていくと考えます。

□立場の明確化
…リーダーに対して教師は、みんなをまとめていくための方法を教えたり、促したりします。フォロアーに対しては「リーダーが決めたことを先生は支持する。」といったリーダーを支える教師の姿勢を示します。
□役割の明確化
…リーダーがみんなをまとめていくためには、フォロアーの協力が不可欠です。子どもたちがそれぞれの役割を果たしていくことができるよう、教師は指導すべきことはしっかり指導し、実践を通して、子どもたちがその関係の大切さを理解できるようにします。

自己有用感を高める評価の在り方・教師の関わり

一人一人の参画する力を高めるためには、成功体験の積み上げと自己有用感の高まりが大切です。話合い活動や実践活動をはじめ、一連の活動を通して、「何を学んだのか」「何ができるようになったのか」を子どもたち自身が実感することで、集団への所属意識や個々の自己有用感の高まりにつながると考えます。

□自己有用感
…「自分の取組は、みんなのためになっている」と自覚することで、相手の立場になって考えたり、仲間と共に取り組んで目標を実現しようとしたりします。自己有用感の高まりは、次の活動への意欲につながります。

そのためには、自己の高まりを感じられるような振り返りの場、互いのよさを認め合う相互評価の場を教師が意図的に設定していくことが大切です。

「評価」の手立てとして以下の３つを大切にし、集団の誰もが分かるように可視化しておくと効果的です。

□計画（活動の見通し）
…いつ、何をするのかをカレンダーなどを活用して掲示しておきます。学級全体が見えるようにすることで、互いの活動の様子が分かり、子どもたちは集団で目的を実現しようとすることができます。
□成果（集団への所属意識・自己有用感の高まり）
…自分たちの成果や成長を掲示しておくことで、自己や集団に対する自信をもつことができます。他者からの評価も得ることができ、それがさらに自信を高めることにつながります。
□課題（次への活動の意欲）
…成果とともに課題を掲示しておくことで、次に改善することが明確になります。子どもたちは、成果を実感することで自信を高めているので、改善点が明確になっていると、その解決に向けて、意欲的に取り組むことができます。

自己有用感を高めるための教師の関わりとして、「教師の価値付け」が必要です。「教師の価値付け」は、「前回の活動と比べてよかったこと」、「次の活動に向けての課題（活動の方向付け）」、子どもたちの努力に対する「労い」の３つを大切にします。

□前回の活動と比べてよかったこと
…活動の過程で、子どもの取り組み方を見取り、個や集団の成長を価値付けます。前回の活動と比べ、子どもの取り組み方のよかったところや活動の質の高まりを教師が伝えていくことによって、子どもたちが自分たちの成長を実感できるようにします。
□次の活動に向けての課題（方向付け）
…活動の状況に応じて、教師は適宜、子どもの取組の様子を評価します。その際、「こうしたのがよかったね。」「さらに〇〇できるか、考えてみよう。」など、子どもたちが活動の方向付けをできる教師の関わりがあると、さらに活動の高まりを期待できます。
□労い
…活動に対する子どもの意欲をさらに高めるのが、教師の労いの言葉です。活動のよかったところだけでなく、子どもの活動の過程も具体的に評価することで、子どもの自己有用感を高めていくことができます。

教師の関わりは、特別活動の学習指導要領における「適切な指導の下」に当たります。子どもの様子を終始見守るだけではなく、集団活動の目標の達成や人間関係の高まりに向けて、意図的、計画的に教師が子どもたちに関わっていくことが大切です。個々の多様性を尊重しながら、それぞれの違いを集団のよさとして活動に生かし、みんなでやり遂げることによって、子どもたち一人一人が集団活動に参画する力を高めていくことができると考えます。

以上、４つのポイントを踏まえながら、以下の実践活動から研究の成果を積み重ねていきます。

○自分の考えをもつとともに、他者の意見を尊重し、互いのよさや違いを生かし合いながら合意形成していく話合い活動
○みんなで活動することによって得られる楽しさの実感と、集団の一員としての自覚を生む実践活動
○個々のよさや違いを認め合い、生かし合おうとする態度を育てる実践活動
○互いのよさや可能性を発揮しながら、仲間と共に集団活動に参画していく実践活動

令和元年～4年度　北海道特別活動研究会

第18次研究の研究構造図

＜時代からの要請＞
- ○「生きる力」の確実な育成
- ○集団や社会の形成者としての見方・考え方の育成

＜特別活動における今日的課題＞
- ○「人間関係形成」、「社会参画」、「自己実現」を踏まえた資質・能力の育成
- ○教育課程全体における特別活動の役割や機能の明確化
- ○内容や指導のプロセスの共有化
- ○各教科等との関連
- ○学級経営の充実～受容的な雰囲気や共感的な土壌づくり～
- ○キャリア教育の充実
- ○自尊感情・自己有用感の向上

＜研究主題＞

多様な他者と協働し、
集団や社会に参画する力を高める特別活動

＜めざす児童・生徒像＞

よりよい人間関係を築く力を高め、自己の生き方についての考えを深めていく子

人間関係形成　　社会参画　　自己実現

17次研究成果と課題

＜成果＞
- ○他者の意見を尊重し、互いに知恵を出し合いながら合意形成を図ることの大切さ
- ○実践力、人間関係形成力を身に付けていくための、一連の活動の積み上げの重要性
- ○児童・生徒の自己有用感を高めるための自己評価・相互評価の在り方

＜課題＞
- ○特別活動で経験したことを日常生活に生かしていくための教師の関わり
- ○資質・能力を高めるための、年間を見据えた全体計画の在り方

＜研究の視点１＞

多様な他者と協働できる活動構成

＜研究の視点２＞

集団や社会に参画する力を高める教師の関わり

〈大会課題〉

第47回函館・渡島大会
互いのよさを認め合いながら、共に活動をつくる楽しさを実感できる集団活動を求めて

第48回札幌大会（開催中止）
互いのよさや可能性を発揮しながら、多様な他者と協働する楽しさを実感できる集団活動を求めて

第49回オホーツク・北見大会
互いのよさや可能性を発揮しながら、多様な他者と協働する楽しさを実感できる集団活動を求めて

第50回札幌大会
互いのよさや可能性を発揮し、生かし合いながら、主体的に参画する楽しさを実感できる集団活動を求めて

＜研究課題＞

第Ⅰ分科会 学級活動部会 （小学校）	第Ⅱ分科会 学級活動部会 （中学校）	第Ⅲ分科会 児童会・生徒会活動、 クラブ活動部会 （小中合同）	第Ⅳ分科会 学校行事・ 全体計画部会 （小中合同）
多様な他者と協働し、共に活動をつくり上げる楽しさを実感できる学級活動	自他の個性を尊重し、互いのよさや可能性を発揮しながら、活動づくりに参画していく学級活動	異年齢の児童・生徒同士で協力し、自発的・自治的に取り組む児童会・生徒会、クラブ活動	互いのよさや違いを受け入れて、認め合いながら、共に活動をつくり上げる喜びを実感できる学校行事・全体計画の在り方

第Ⅰ分科会（小学校学級活動部会）基調提言

多様な他者と協働し、共に活動をつくる楽しさを実感できる学級活動

北海道特別活動研究会　研究部

1　研究課題のとらえ方

学級活動のねらい

学級活動は、学級や学校での生活をよりよくするために合意形成したことを実践したり、自己の課題の解決及び将来の生き方を描くために意思決定して実践したりすることを通して、目指す資質・能力を育成していくことをねらいとしている。学級を単位として、楽しく豊かな学級生活を築いていく集団活動であり、学級生活の充実と向上を目指し、他者と協力したり、個人として努力したりしながら自主的、実践的に取り組むことによって、活動することの楽しさや成就感、達成感を得たり、自己有用感を高めたりすることにつながるものである。学習指導要領では、子どもの実態に適切に対応するため、以下のように発達段階に応じた内容を示している。

集団討議による合意形成の場

学級活動（１）「学級や学校における生活づくりへの参画」の指導では、学級や学校の生活をよりよくするための課題を子どもたちが見いだし、課題に向けて協働しながら、主体的に活動をつくり上げる力を高めていくことが大切である。学級活動（１）における話合い活動は「集団討議による合意形成の場」である。

低学年…話合いの進め方に沿って、自分の意見を発表したり、他者の意見をよく聞いたりしながら、合意形成して実践する。
中学年…理由を明確にして考えを伝えたり、自分と異なる意見を受け入れたりしながら、集団としての目標や活動内容について合意形成して実践する。
高学年…互いの思いや願いを共有し、多様な意見のよさを生かし合いながら、合意形成して実践する。

発達段階に応じて「なかよく助け合い」「協力し合って」「互いに信頼し支え合って」実践することによって、子どもたちは生活や活動を主体的につくり上げていく力を高めることができる。

集団思考を生かした個々の意思決定の場

学級活動（２）「日常の生活や学習への適応と自己の成長及び健康安全」及び学級活動（３）「一人一人のキャリア形成と自己実現」の指導では、現在及び将来の問題について、自分で考え、判断し、実践できる力を高めていくことが大切である。学級活動（２）及び（３）における話合い活動は「集団思考を生かした個々の意思決定の場」である。

低学年…基本的な生活習慣や約束やきまりを守ろうとすることの大切さを意識し、意思決定して実践する。
中学年…集団の中で自分がどのように行動していくことが望ましいかを意識し、意思決定して実践する。
高学年…一人一人がより高い目標に向けて、自分はこれからどのように行動するのかを意識し、意思決定して実践する。

教師は子どもが意思決定したことを実現できるように努力を見取り、自他のよさを伸ばし合うように支援していく。教師が子どもの努力を可視化したり、互いの成長を実感する場、認め合う場を意図的につくったりしていくことで、子どもたちは自己有用感を高めていくことができる。

分科会テーマを受けた具体的な取組として、次の内容が考えられる。

具体的な取組の例

○互いの思いや願いを共有し、多様な意見のよさを生かして合意形成を図る話合い活動
○合意形成や意思決定に対して粘り強く努力し、自他のよさを伸ばし合う実践活動
○自分の経験や身に付けた力を生かす場が設けられ、活用する力が高まる実践活動
○互いのよさや可能性を発揮しながら、仲間と共に集団活動に参画していく実践活動

2　話合いの視点

視点１　よりよい生活や活動づくりのために、自分の役割をもって主体的に問題を解決していく学級活動はどうあるとよいか。
視点２　互いのよさや可能性を生かし合いながら取り組み、よりよい人間関係を築いていくことができる学級活動はどうあるとよいか。

第Ⅱ分科会（中学校学級活動部会）基調提言

自他の個性を尊重し、互いのよさや可能性を発揮しながら、活動づくりに参画していく学級活動

北海道特別活動研究会　研究部

1　研究課題のとらえ方

学級活動のねらい

学級活動は、学級や学校での生活をよりよくするために合意形成したことを実践したり、自己の課題の解決及び将来の生き方を描くために意思決定して実践したりすることを通して、目指す資質・能力を育成していくことをねらいとしている。学級を単位として、楽しく豊かな学級生活を築いていく集団活動であり、学級生活の充実と向上を目指し、他者と協働して実践したり、個人として努力したりしながら自主的、実践的に取り組むことによって、現在及び将来の自己と集団との関わりを理解し、健全な生活や社会づくりの実践力を高めるものである。

意見の違い多様性を生かして合意形成する

活動内容（１）「学級や学校における生活づくりへの参画」においては、学級成員に共通する課題を取り上げ、自主的、実践的な活動を通して、学級や学校生活づくりを図っていくことが必要である。学級は生徒にとって、学校生活を送る上での基礎的な生活の場である。生徒が自己有用感を感得し、自分の個性を発揮して活動しながら自己の生き方や将来に対する夢を膨らませるなど、学級が心の居場所となるような配慮が望まれる。そのために、そこで生じる人間関係や生活上の様々な問題について、集団の一員としての自覚と責任感に基づき、自分の役割を発揮しながら、仲間と協力して解決していこうとする自主的、実践的な活動を進めていくことが大切である。

多面的・多角的に考えて意思決定する

活動内容（２）「日常の生活や学習への適応と自己の成長及び健康安全」においては、社会の成員として必要とされる資質や能力を培っていくという観点から、人間としての生き方についての自覚を深め、社会の中で自己を正しく生かす能力を養うことと広く関わらせながら指導していくことが大切である。活動内容（３）「一人一人のキャリア形成と自己実現」においては、学ぶこと、働くこと、そして生きることについて自己の問題としてそれぞれの結び付きを理解し、多様な他者と協働しながら、自分なりの人生をつくっていく力を育むことが必要である。多面的・多角的に、自己の生き方を見つめることを通して、自分で考え、行動していく力を高めていく。なお、学級活動の３つの内容は、直接、間接に関連している。生徒の実態や取り上げる議題や題材に応じて内容間の関連や統合を図るなど、指導方法の工夫が大切である。

分科会テーマを受けた具体的な取組として、次の内容が考えられる。

具体的な取組の例

○互いの思いや願いを共有し、多様な意見のよさを生かして合意形成を図る話合い活動
○集団の一員として学級生活の諸問題を自己の役割を発揮しながら、協力して解決していこうとする実践活動
○社会・集団の一員としての自覚と自己有用感が高まる実践活動
○３内容の効果的な関連を図った指導方法の工夫

2　話合いの視点

視点１　よりよい生活づくりへ向けて自分の役割を発揮しながら、主体的に問題を解決していく学級活動はどうあるとよいか。
視点２　互いのよさや可能性を生かし合いながら取り組み、集団活動の魅力を実感していくことができる学級活動はどうあるとよいか。

第Ⅲ分科会（児童会・生徒会、クラブ活動部会）基調提言

異年齢の児童・生徒同士で協力し、自発的、自治的に取り組む児童会・生徒会、クラブ活動

北海道特別活動研究会　研究部

1　研究課題のとらえ方

児童会・生徒会活動、クラブ活動のねらい

児童会・生徒会、クラブ活動は、異年齢の子どもによって組織される自発的、自治的な活動である。「課題を見いだし、解決に向けての話合いを経て、合意形成を図って解決方法の決定を行い、決めたことを実践し、振り返り、次の課題に向かっていく」という基本的な学習過程を通して、目指す資質・能力を育成していくことをねらいとしている。上学年は下学年に対して思いやりの気持ちをもって接し、下学年は上学年にあこがれや尊敬の気持ちをもって協力できるようにするなど人間関係をよりよく形成することができる機会となる。教師の適切な指導の下、活動の仕方やきまりを工夫することで、経験差や年齢差を補い、異学年の児童・生徒が協力して楽しく活動できるようにすることが大切である。このような自発的、自治的な態度は、次の代に脈々と受け継がれ、学校としての伝統になっていくのである。

発達段階に応じて、役割意識をもたせる

「異年齢の児童・生徒同士で協力し」とは、学年や学級が異なることから、様々な経験の違いが見られる中で、一人一人の個性が発揮され、協働による集団活動を展開しようとする姿である。児童・生徒相互の人間関係を密にして活動できるようにする必要がある。中心となって活動を進める上学年の児童・生徒が、リーダーとしての経験を積み重ねながら自分の役割を果たすなどの主体的な取組を通して、上学年の自覚や自分への自信を高めていくことが大切である。そうすることが、下学年の児童にとっては、上学年の児童・生徒にあこがれや尊敬の気持ちをもち、「自分もこうなりたい」という思いや願いをもつことにつながり、学校生活に目標や希望をもつことにもつながる。そのようなつながりを生むために、発達段階に応じて、役割意識をもたせることを大切にしていきたい。

自発的、自治的な活動を生む教師の関わり

「自発的、自治的に取り組む」とは、児童・生徒が主体的に取り組む活動であることを理解しながら学校生活を共に楽しく豊かにするという共通の目標を共有し、その実現を目指して取り組む姿である。課題について話し合い、意見をまとめ、合意形成したことについて自己の役割や責任を果たし、協力して実現できるような活動の機会をより多く設定することが大切である。

児童会・生徒会活動、クラブ活動を活発にするためには、各活動を推進するための指導体制を確立し、計画や運営を行う児童・生徒に積極的に教師が関わる必要がある。常に子どもたち自身が学校全体の生活を充実・向上させるために課題に気付いたり、それらを自分たちで解決しようとしたりする意欲を高め、協力して諸問題を解決するなど、楽しく豊かな学校生活づくりに進んで参画できるよう組織的な指導に努めることが大切である。

分科会テーマを受けた具体的な取組として、次の内容が考えられる。

具体的な取組の例

○異年齢の関わりを生かした年間指導計画と評価の工夫
○互いの思いを共有し、計画していくための実践活動
○児童会・生徒会活動、クラブ活動と地域社会との連携を踏まえた実践活動
○振り返りを生かしながら、自分たちの成長を実感できる実践活動

2　話合いの視点

視点１　異年齢の児童・生徒が自己の役割を意識し、より自発的、自治的につくり上げる活動はどうあるとよいか。

視点２　異年齢の児童・生徒同士が協力し、集団活動の質を高めていくことができる教師の関わりはどうあるとよいか。

第Ⅵ分科会（学校行事・全体計画部会）基調提言

互いのよさや違いを受け入れて、認め合いながら、共につくり上げる喜びを実感できる学校行事・全体計画の在り方

北海道特別活動研究会　研究部

1　研究課題のとらえ方

学校行事のねらい

行事や集団活動のねらいを共有化

互いのよさや違いを受け入れて、認め合う

多様な他者と協働できる指導計画の工夫

学校行事は、全校又は学年の児童・生徒で協力し、よりよい学校生活を築くための体験的な活動を通して、集団への所属感や連帯感を深め、公共の精神を養いながら、資質・能力を育成することを目標としている。その内容は、全校又は学年を単位として、学校生活に秩序と変化を与え、学校生活の充実と発展に資する体験的な活動を行うことにある。学校行事における様々な体験の場は子どもの心を育て、集団における人と人とのふれ合いやつながりを深め、社会を尊重し、主体的にその形成に参画する態度を養う。

学校行事のねらいを達成するためには、多様な他者と協働して活動をつくり上げていくことが大切である。多様な他者と協働するためには、「指導の在り方」「場の設定」「時間の確保」について考える必要がある。まずは、各行事の特質を捉え、行事を通してどのような資質・能力を育成したいのかという目標を全教職員で共通理解することが大切である。行事のねらいを明確にすることで、何を通して、どのように学ぶかという「指導の在り方」が見えてくる。一連の活動の過程で、教師が教えるのではなく、子どもたちが創意工夫できる「場の設定」と「時間の確保」をすることによって、多様な他者と協働し、子どもたちが主体的に活動をつくり上げる姿が生まれるのである。行事のねらいや集団の目標を共有し、一人一人が目的意識・役割意識を明確にもって、他者と協働して活動をつくり上げることによって、学校行事を「自分たちでつくり上げる」という参画意識を高めていくことができる。

また、「多様な他者をつなぐ教師の関わり」も大切である。教師の適切な関わりのもと、活動に取り組み、互いのよさや違いを受け入れて、認め合う体験を積み上げることによって、多様な他者と協働しながら、人間関係を築く力や集団活動に参画する力を高めていくことができる。よりよい学校行事が展開されるよう、各教科・領域等との関連や評価の観点や方法などについて、計画の段階から見通しを立てておき、年度途中でも行事の改善につながるようにしておくことも大切である。

特別活動の４内容（３内容）には、それぞれ目標があるが、全て特別活動の目標を目指して行われるものである。各内容では、教師と子ども、子どもたち同士の人間的なふれ合いを通して、互いのよさを認め合い、自己のよさや可能性に気付き、集団の一員として学級や学校生活の中で自己の役割をよりよく生かしていくことが大切である。各学校において目指す資質・能力の育成に向け、特別活動の各内容を効果的に関連付けていくためにも、各内容の活動の目標やねらいを精査していかなくてはならない。よりよい活動へ向けて、多様な他者と協働しながら問題解決を図るための言語活動と自分たちが成長を実感できる実践活動の充実は重要である。そのような活動を積み上げていくためには、教職員が年間の重点目標を具体的に共有し見通しをもって指導にあたることや、活動の効果が最大限発揮できるような計画を立てることが大切である。一連の活動を通して、子どもたちに学校の一員としての所属感や連帯感、地域社会の一員としての自覚や責任を育み、集団や社会に参画する力を高めていきたい。

分科会テーマを受けた具体的な取組として、次の内容が考えられる。

具体的な取組の例

○行事の特質を捉え、活動のねらいを明確にもち、目的や役割を意識しながら取り組む実践活動
○特色ある学校づくりをするための学校行事と全体計画の在り方
○多様な他者と協働し、活動をつくり上げる学校行事の具体的な展開
○行事の改善に向けた具体的な評価規準と、指導と評価の一体化

2　話合いの視点

視点１　互いのよさや違いを受け入れて、共に活動をつくり上げる学校行事はどうあるとよいか
視点２　集団や社会に参画する力を高める全体計画はどうあるとよいか

第Ⅰ分科会　小学校学級活動

自他のよさを実感し、主体的に関わり合うための掲示と指導の工夫
～成長の足跡の効果的活用を通して～

網走市立南小学校　　佐藤　　宏

１．学校のプロフィール・子どもの実態

本校は、オホーツク管内の東部に位置し、児童数 269 名、学級数 19 学級（内特支 7）と管内では中規模の学校である。校区にはスーパーマーケット等の店舗が充実し、利便性もある。

学校の伝統として「ふやそうポカポカ言葉、なくそうズキズキ言葉」を合言葉にした心あったか運動が位置付けられ、友達に対して温かく接し、落ち着いた生活を送っている。素直で何事にも熱心に取り組める一方で、新たな活動を創り上げたり、主体的に物事に挑戦したりする姿勢には課題が見られる。

２．分科会テーマを受けて

学級活動を楽しく充実したものとして実感できるようにするためには、まず一連の学習活動の中で「自己の達成感」を繰り返し感じさせることが大切である。それに加え、「他者との充実した関わり」を十分に味わわせることが、楽しさを一層実感できる学級活動へと繋がる。

一連の学習活動の中では、他者との関わりの場を充実させた上で、活動における自己・相互評価の場を意図的に設定する。その評価の中で見られた成長の足跡を可視化し、そのよさを互いに認め合いながら、よりよい学級活動を目指すことの意義は大きいと考える。

本分科会の基調提言を受けて、他者と共に活動をつくり上げる楽しさを実感できる学級活動を目指すためには、一連の活動の中で、個や集団にとってのよさや成長を意図的・計画的に実感させることが大切であると考える。そのために、意図的な掲示と指導の工夫に注目し、次の３つの視点で実践提言をする。

（１）一連の学習過程における自他の成長の可視化
（２）成長の足跡の効果的な活用と蓄積
（３）実態に適した目指す児童の姿の見通しと指導

３．実践の概要

（１）一連の学習過程における自他の成長の可視化

毎回の学級活動で見られた成長の姿を「話合いの準備、話合い、実践の準備、実践」の４段階に分けて掲示物で可視化する。この掲示により、一連の学習活動を常に意識しながら主体的に活動することができる。また、他者と協働して取り組んでいる姿を意図的に価値付けた掲示にすることで、他者と共に活動を創り上げるよさを実感できるものとなる。

細かな成長の足跡を通年で活用することは、成長を実感する機会の量的な充実にも繋がる。

（２）成長の足跡の効果的な活用と蓄積

一連の学習過程の掲示を、各過程における「個々の目標設定」の場面で使ったり、振り返りの時に「メタ認知を生かした蓄積」として活用したりする。

４段階の活動への目標を立てる際、今自分は何を目指すのかを主体的に考えて活動ができる。

また、活動でメタ認知したことを児童自身が生かして成長の蓄積として創り上げていくことが、主体的に自他のよさに目を向け、実感する機会となる。

（３）実態に適した目指す児童の姿の見通しと指導

児童が自信をもって活動に取り組むためには、目の前の児童に適した段階的な指導を行う必要がある。そのために、発達段階と児童の実態の両面から、目指す児童像を明確に捉える。年間を通して、系統性をもった指導をすることで、確かな成長から児童の達成感を高め、より主体的に活動する姿に繋げる。

４．まとめ

掲示の効果的活用と指導の充実を図ることにより、児童が確かな成長を実感し、他者との関わり方やそのよさも感じながら活動できるようになった。成長が見えることで、主体的に活動する子が増えている。今後は、各活動において個や集団が成長している姿をより詳細に見取るための工夫が必要である。

第Ⅱ分科会　中学校学級活動

自他の個性を尊重し、互いのよさや可能性を発揮しながら、活動づくりに参画していく学級活動

函館市立亀田中学校　　高神　麻由

１．学校のプロフィール・子どもの実態

本校は函館市の住宅街に位置し、道南有数の大規模校である。校訓「融合　開拓　自治」に沿って「心豊かで　たくましく生きる生徒」「めあてをもち　学びとる生徒」「自分の考えを　表現する生徒」を教育目標とし、自治的な活動に力を入れている。

（１）一人一人の子どものよさが生きる取組

生徒会活動では、一人一台端末を活用して学級から生徒会への意見集約をオンラインで行うことで、ボトムアップ型の運営を目指している。

（２）日常の取組

全校で特別活動の時間に「はがき新聞」を使って自分の考えをまとめ、掲示する活動を行っている。従来の作文と違って、他者に自分の考えを見える形で表現する機会となっている。

２．分科会テーマを受けて

分科会のテーマを受けて次のように研究の視点との関連を図りながら、自他の個性を尊重し、互いのよさや可能性を発揮できるように計画した。

研究の視点１の「多様な他者と協働できる活動構成」については、学級力アンケートという数値とグラフを根拠に議論をする機会を設けることで、生徒が自己評価と相互評価の活用しながら互いのよさや可能性を発揮できるようにした。

研究の視点２の「集団や社会に参画する力を高める教師の関わり」については、学級会に向けた学級活動委員会との事前の打ち合わせを充実させ、様々な議論の推移の可能性を想定して準備することで、生徒が自分たちの力で合意形成できるようにした。教師が適切に関わることで、生徒が学級の仲間と協働しながら、リーダーシップとフォロワーシップを発揮して、主体的に集団の課題の解決を図ることができるように工夫した。

３．実践の概要

（１）学級力向上プロジェクトの活用

学級力向上プロジェクトとは、早稲田大学大学院の田中博之教授が開発した学級経営システムである。次のような手順で学級の様子を生徒が自己評価し、生徒が学級づくりの主人公となって活動しながら仲間づくりを行う取組である。アンケート結果を生徒に公開する点や、課題把握と解決への方策を生徒が主体的に決定する点が、従来のアンケートとは異なる。

①学級力アンケートの実施
②学級力アンケートの分析
③改善策の決定
④改善策の実施

以上の①～④の手順を繰り返すことで、年間を通して計画的に学級力の向上を目指す。

（２）学級会での改善策の話合い

アンケートの結果を数値とグラフで生徒に提示し、その結果を分析した上で，学級会で課題の解決方法について合意形成を図った。学級会の経験が少ない学級ではあったが、データを基に目指す学級の姿について意見を述べたり、具体的で実効性のある改善案を提案したりすることができた。

（３）成果の可視化の工夫

学級力アンケートの結果や学級会で議論した内容を掲示物にしたり、学級通信で紹介したりした。学級会の内容や決まったことを文字や写真の形で残すことで、成果を可視化するように努めた。

４．まとめ

本実践では、次のような成果があった。

・個々の意識の差を共感的に理解し合い、学級の当事者としての意識を高めながら、集団として同じ目的に向かって活動していく経験をすることができた。
・一人一人の思う「理想的な学級の形」について対話することで、支持的風土の醸成と自己有用感の向上による学びを支える土台づくりができた。
・アンケートという客観性のあるデータを基に、学級の課題を解決する方法を生徒が具体的に話し合うことで、一人一人の意識や行動に変容が見られた。

今後は、学級力向上プロジェクトを一過性の取組としないことが課題である。他の学級と連携したり、保護者に対する情報発信を積極的に行ったりしながら、生徒が主体の活動を充実させたい。

第Ⅲ分科会　小中合同児童会･生徒会、クラブ活動

多様な他者との交流を通して 自主性・協調性を身に付けていくクラブ活動

厚岸町立真龍小学校　　竹内　明生

１．学校のプロフィール・子どもの実態

厚岸町は北海道の南東部に位置し、東は浜中町、西は釧路町と接している。南には厚岸湾が深く入り込み厚岸湖に通じており、この水際に市街が広がっている。本校は警察署、役場、郵便局などの公共施設に囲まれる場所に位置している。児童数は235名、通常学級８学級、特別支援学級７学級の中規模校である。

本校では、異年齢の児童が交流できる場を多く設定している。中でも、「縦割り班活動」においては、清掃活動と遊びなどの活動を通して児童同士が協力して活動している。それらの活動を通して高学年のリーダーシップや、低・中学年の自主性や協調性の素地を育んでいる。

クラブ活動では、内容について児童がアイデアを出し合いながら、活動を企画している。主体的に話合いを進めていくことに課題は見られるが、教師の適切な助言を受けながら、少しずつ自分たちで活動を運営する力を高めている。

２．分科会テーマを受けて

本校のクラブ活動は、４年生以上で組織し、プログラミングクラブ、読書クラブなど10種類のクラブ活動がある。クラブを決定する際には児童の希望をとり、できる限り希望に沿って決めることができるようにしている。

クラブ活動では、教師の適切な指導の下、活動内容やきまりを工夫することで経験差や年齢差を補い、協力して楽しく活動できるようにすることが大切である。また、話し合って合意形成したことについて、役割や責任を果たす場面を設定して実践することが重要であると考える。

本実践では、「異年齢の仲間と協働する力」、「自主的・自治的に取り組む力」に焦点を当て、児童が自ら考えるための指導の工夫や異年齢の他者との関わりが生まれるように活動内容を工夫した読書クラブの取組を紹介する。

本実践で身に付けたい資質･能力	⇔	実践
○自主的・自治的に取り組む力 ○異年齢の仲間と協働する力		○児童が自ら考えるため指導の工夫 ○活動内容の工夫

３．実践の概要

（１）児童が自ら考えるための指導の工夫

・学校司書教諭と連携を図った活動計画の立案

・教師と共に作成した活動計画の原案をもとに、自分たちの考えやアイデアを生かすことのできる話合いの場の設定

・クラブの成果発表会を設定することによって活動の目的を明確化

・厚岸情報館での校外学習における読書に対する新しい価値観の発見

・学びの整理や次の活動につなげるための毎時間の振り返り

・児童がより自分事として考えることができるような教師側からの情報提供

（２）活動内容の工夫

・異学年の児童が交流できる活動を意図的・計画的に設定

・厚岸情報館での校外学習

・活動の成果として「読書郵便」を校内掲示

４．まとめ

○なかなか考えを発表できなかった児童も活動を重ねる中で発言できるようになった。

○「読書郵便」の作成に向けて、気に入った本の紹介を意欲的に書くことができた。

○６年生が下級生をまとめようとする姿勢が少しずつ見られるようになった。

△振り返りの交流の設定が時間的に難しかった。

△クラブ活動における評価と指導の一体化が難しかった。

△話合いを進めるための基礎・基本の定着に課題が見られた。学級活動（１）における学びを校内でも充実させる必要がある。

第Ⅲ分科会　小中合同児童会・生徒会、クラブ活動

コロナ禍においても活動を止めない、自発的・自治的な生徒会活動

大空町立女満別中学校　　小森　敬宗

１．学校のプロフィール・子どもの実態

大空町はオホーツク管内東部の内陸に位置し、2006 年に女満別町と東藻琴村の合併によって誕生した。本校は生徒数 149 名、学級数 9（内特支 4）の中規模校である。多くの生徒が純朴で素直であるが、幼少期からの固定化した人間関係による馴れ合いもあり、向上心の乏しさや新たなリーダーが育ちにくい側面も見られる。

２．分科会テーマを受けて

昨今の新型コロナウィルス流行に伴い、昨年度は休校や分散登校が続いた。新しい生活様式による学校生活は今までとは異なり、全校生徒で集まることができないなど、様々な制約があった。そのため、学校は異年齢集団活動の充実に重要な役割を果たす生徒会活動より、教科の学習が中心に進められるようになった。しかし、現代において「教科の学習」は必ずしも学校でなくても行うことができる。塾や家庭教師に加え、タブレット学習やオンデマンド視聴、リモート授業等、様々な「教科の学習」ができる。では「コロナ禍においても学校に登校する意味とは何か。」と考えたとき、「教科の学習」以外にも学校の意味（価値）が必要である。

そんなとき、本校生徒会役員から「せっかく学校に登校しているのだから、何かしたい。」「生徒会の力で学校を楽しい場にしたい。」などの声があがった。常日頃から「must（～ねばならない」より「want（～したい）」活動をやろうと伝えている生徒たちからの自発的な発想で生まれた実践を紹介する。

３．実践の概要

本校は前期生徒総会を Zoom によるリモート形式で実施した。全校生徒が一堂に会しての審議ではなかったが、学級ごとの話合いがしやすく、一人一人が自分ごととして審議に参加することができた。前期生徒総会を元に、新しいことに挑戦しようとする姿勢が芽生え、以下の実践を行った。

（１）校内レクの工夫

数年前から本校では「女中（女満別中）っていいよね」といわれるための生徒会主催の楽しい企画「女中っていいよね。プロジェクト（略して『いいプロ』）」を行っている。例年、春には新入生との親睦を深めるレクを企画していたが、コロナ禍で断念した。そこで思いついたのが「紙飛行機、どこまで飛ばせるかな？選手権」である。体育館のギャラリーから休み時間ごとに５，６名ずつが紙飛行機を飛ばして印をつけ、最終的に誰が一番飛んだかを競った。全校の上位５名による決勝戦ならびに表彰式は各教室に Zoom 配信して実施した。

（２）学校祭の工夫

例年であれば学校祭の中で「全校合唱」を生徒会主導で行っていた。そんな中、コロナ禍により合唱が中止になったため、その代替として生まれたのが「全校制作」である。大きな壁画を全校人数分のピースに分け、一人一人が作成したものを結合して１つの大きな作品を作った。

また、記憶は音楽と結び付いて思い出になることが多くある。その記憶となる音楽（合唱）がないため、学校祭のテーマソングを考え、学校祭期間中に流し続ける活動を行った。

（３）昼食時の笑顔を取り戻すための工夫

以前の生活との違いを生徒が考えたとき、コロナ禍による黙食が挙げられた。以前のような楽しい時間にするには放送の力が必要であると考えた。「聴いているだけでも楽しい放送」を委員会に提供してもらうため、見本として「生徒会ラジオ」というものを実施した。その影響もあり、現在では放送委員会で行うお昼の放送も全校の楽しみとなっている。

（４）他校との交流

オホーツクでは以前から「生徒会サミット」という管内の生徒会役員との交流の場がある。一昨年度は吹雪のため中止であった。その代替として、近隣の学校や他県の学校と Zoom を活用したリモート交流を行った。その経験を生かし、昨年度の「生徒会サミット」は Zoom によるリモート開催で実施することができた。

４．まとめ

コロナ禍の最中、以前のような活動が難しい学校生活ではあるが、本校ではこのピンチをチャンスと捉え、新たなことに挑戦し続けた。学校の主人公である生徒たちの自発的・自治的な声に寄り添い、それを具現化していく手助けをするのが我々教師の務めであると考える。

第Ⅳ分科会　小中合同学校行事・全体計画

学校行事から育成する特別活動の資質・能力

小樽市立山の手小学校　　日下部　匡彦

１．学校のプロフィール・子どもの実態

本校は開校４年目の学校であり、『凡事徹底』を合い言葉に学校・家庭・地域が積極的に手を取り合い、共に成長し合いながら、学校や地域の特性を最大限に生かした教育活動を推進している。通常学級１２学級、特別支援学級５学級、全校児童数４１３名の小樽市内では２番目に規模の大きな学校である。

開校当初は、統合前の学校環境の違いから校内生活で主張がぶつかり合う場面も見られた。そこで「協力して取り組む活動」「児童が活躍する場の設定」「互いを認め合う雰囲気づくり」の３点を通して、友達のよさを認識するとともに、自己有用感を高められるように取り組んできた。

２．分科会テーマを受けて

分科会のテーマ『認め合いながら共につくり上げる喜びを実感できる学校行事』は、本校の開校にあたり、グランドデザイン作成の柱になった１つである。統合協議会の「学校と地域が一体となって特色ある学校づくりをして欲しい」との願いを受け、学びや体験を充実するための学校行事を地域に公開し、アンケート等の意見集約から改善を進めている。

『喜びを実感する』ためには、目標達成に向かって様々な考えを取り入れ、成長していく過程を認識させる必要がある。そのため、日常の授業では、
①意見交流による認め合う姿勢の醸成
②思考から根拠を明らかにした意思決定の場の設定
③授業後の変化を見取る振り返り
を視点とし、実践が積み重ねられている。

上記の取組は、特別活動において育成すべき資質・能力の重要な視点「人間関係形成」「社会参画」「自己実現」が含まれ、共生社会でよりよく生きる力を獲得できるものと考えている。

３．実践の概要

（１）１年間の成長を見つめる歌声集会

気持ちを合わせて曲をつくり上げようとする心や自らを表現しようとする意欲を高めるための活動である。地域公開日・学芸会・卒業式で、低学年合唱（１～３年）・高学年合唱（４～６年）・全校合唱・低高共通曲の４曲を披露する。３学年と６学年はリーダーとしての自覚が芽生え、他学年は一緒に歌声を創り上げる中で、所属意識が生まれる。

歌を聴き合うことで他者のよさを認め、練習を振り返ることで自分の成長を見つめる。また、ハーモニーを意識することで、集団の形成者としての見方や考え方が培われる。

（２）ボランティア活動を含む天狗山登山

異学年の縦割り班による交流を通して、決まりを守る心や互いを励ましあう心を育てるなど、望ましい集団行動の在り方を学ぶための活動である。山頂では高学年が考えた遊びの交流とゴミ拾い活動を位置付けている。

登山前に集会を開き、班ごとの目標づくりやルール作りを行うことで、集団の一員であることが意識される。登山中は互いを励まし合うことで、協力する大切さを学ぶ。ゴミ拾いを行うことで、人の役に立つ喜びを知る。

（３）マラソン記録会

最後まで走り通す体力や、達成感や自信をもち明るく前向きに生活する意欲を高め、励まし合って完走することで仲間の存在意義を実感させるための活動である。行事ボランティア募集を呼びかけ、保護者や地域の方も参加している。

体育の授業でコース確認を兼ね、練習を実施。自己目標を設定し、記録達成に向け努力する。保護者と一緒に早朝や放課後に練習する児童も見られ、記録は、学校玄関ホールに掲示している。

４．まとめ

児童が学校行事の意義を理解し、教育目標達成に向けた取組ができるように教員が児童を支援することが重要である。そのためには、行事実施までの計画過程や意義を児童に伝えるとともに、目標や振り返りの時間を設定する必要があった。つまり、学校行事においては、目標設定と意思決定（なりたい自分）、意見の調整と協働（築きたい人間関係）、所属意識と達成意欲（社会への参画）を視点とした特別活動の授業を意識したい。また、地域に活動の様子を発信し、ボランティアを募ることで、児童が大人になったときに地域との関わり方を知り、社会参画意識が高まると考える。同時に、地域から信頼と協力を得ることにつながり、質の向上を目指すカリキュラム・マネジメントの実現ができると思われる。

第Ⅳ分科会　小中合同学校行事・全体計画

互いのよさや違いを受け入れて、認め合いながら、共に活動をつくり上げる喜びを実感できる学校行事・全体計画の在り方

札幌市立簾舞中学校　　笹井　賢一

１．学校のプロフィール・子どもの実態

札幌市立簾舞中学校は、開校73年目を迎える学校である。簾舞という地名は、元来ニセイオマップと呼ばれていた地がミソマップと訛るようになり、漢字表記する際に簾舞になったと言われている。札幌市南区に位置しているが定山渓に近く、自然豊かな環境である。昨今は生徒の減少が著しく、現在は通常学級４学級の小規模校である。

「緑の風に夢のせて　未来を拓く人となれ」は、平成14年度に改められた学校教育目標の「冠」である。豊かな自然環境の中で育ち、比較的素直な子どもたちであるが、広く社会や世界に目を向け、人生を創り出していく逞しさに欠ける面が見られることから定められた。これまで、この目標の具現化に向けて、教育活動を工夫してきた。学校が小さくなったからこそ、「全教師で、全生徒を見とる」ことを大切に、日々実践に取り組んでいる。

２．分科会テーマを受けて

前述の通りである本校は、簾舞小学校からの児童全員と、藤野小学校からの児童数名を受け入れて学年が構成されており、単学級となることも少なくない。固定化された人間関係がもたらす難しさを秘めている上、札幌市中心街から離れた環境では刺激も少なく、学校行事がもつ意義は大きい。全校又は学年などの大きな集団で行われる学校行事だからこそ、本校の子どもたちは、人と人との関わりの中で、よりよい学校生活や人間関係を築く力を育成していけるのである。

しかし、新型コロナウイルス感染症の影響は大きく、学校行事の中止・縮小が求められた。感染対策を講じながら学校行事を計画するとき、何を大切にしながら活動していけばよいのか、日本全国の学校同様、本校も悩んで取り組んできた。

コロナ禍においても、多様な他者と協働しながら主体的に生徒がつくり上げた２つの実践を本分科会のテーマに沿い提案する。

３．実践の概要

（１）陸上記録会改め体育祭

札幌市においては、令和２年６月１日に「教育課程再編成のガイドライン」が示され、各学校で活動を工夫しながら企画･運営することになった。例年、初夏に陸上競技場を借りて行う「陸上記録会」はできなくなったため、学校のグラウンドで「体育祭」を開催することにした。

実施に当たって配慮した点は、「手洗い・消毒、距離の維持の徹底」「午前は個人と団体の競技を行い、応援される喜び、する喜びを味わえること」「午後は全員リレーを行い、団結できる場面とすること」「生徒会役員、保健体育常任委員、放送局の活躍できる場を確保すること」「少人数の保護者の観覧を認めること」等である。

９月に実施したが､久しぶりの行事で盛り上がり、学級の団結力は高まったし、役員・委員・局員は積極的に活動した。全員で後片付けや清掃を行ったが、最後まで熱心に取り組んでいた姿からも、学校行事を自分たちの手で作り上げたという満足感が感じられた。振り返りの活動でも、多くの人と関わることで何かしら自分自身の成長を実感した表現が多かった。

（２）総合祭＋合唱コンクール＝Project ZERO

本校では学校祭を総合祭と呼んでいる。感染リスクが高いことから合唱コンクールを断念し､2つの行事を統合した「生徒会主催文化的行事」に取り組むことにした。いつも中心になって活動する生徒会役員が相談し､「Project ZERO」と名付けた。

各学級と美術部・吹奏楽部の発表時間をそれぞれ短縮して組み合わせ、体育館で全校生徒が集まって実施することにした。感染リスクを考え、各学級の発表は旅行的行事の振り返り、吹奏楽部は動画による演奏発表となった。美術部は多くの静止画を組み合わせた動画を制作し、驚かせていた。

４．まとめ

上記のProject ZEROは、新旧生徒会役員や引退する部員の貴重な出番になったが､「総合的な学習の時間」的な要素が多く、反省点も残った。

しかし、前例が無いことを利点に生徒自ら企画運営に積極的に参加し、自らの可能性を実感することができた。今年度もコロナ禍で工夫して実践に取り組んでおり、反省を生かした取組にしたいと考えている。

令和3年度

北海道特別活動研究会役員名簿

歴代会長	白　石　信　義	初代会長	井　内　良　彦	１６代会長
	高　橋　義　勝	２代会長	佐々木　正　夫	１７代会長
	松　田　善　雄	３代会長	野　尻　桂　子	１８代会長
	松　山　正　生	４代会長	越　智　英　昭	１９代会長
	松　村　郁　夫	５代会長	石　川　浩　輝	２０代会長
	小　川　盛　夫	６代会長	佐　藤　　　信	２１代会長
	古　本　　　実	７代会長	濱　田　美　樹	２２代会長
	宮　本　隆　介	８代会長	小　林　秀　行	２３代会長
	涌　島　政　典	９代会長	津　島　髙　明	２４代会長
	深　田　正　志	１０代会長	長　尾　幹一郎	２５代会長
	佐々木　忠　夫	１１代会長	佐々木　晃一郎	２６代会長
	田　中　博　信	１２代会長	加　藤　佳　栄	２７代会長
	池　田　　　修	１３代会長	宮　原　伸　子	２８代会長
	徳　田　俊　彦	１４代会長	高　橋　正　行	２９代会長
	笹　浦　光　男	１５代会長		

顧　　問	濱　田　美　樹	２２代会長
	津　島　髙　明	２４代会長
	佐々木　晃一郎	２６代会長
	加　藤　佳　栄	２７代会長
	宮　原　伸　子	２８代会長
	高　橋　正　行	２９代会長
会　　長	北　原　徹　也	札幌市立平岸西小学校長
副 会 長	山　本　祐　司	札幌市立新陵東小学校長
	山　下　尊　子	札幌市立菊水小学校
	小　田　英　人	札幌市立大倉山小学校
	深　澤　昌　明	函館市立磨光小学校長
	高　見　恭　介	室蘭市立翔陽中学校長
	二　瓶　明　紀	釧路市立新陽小学校長
	日下部　匡　彦	小樽市立山の手小学校長
	神　成　　　浩	新ひだか町立静内中学校長
	保　科　浩　則	遠軽町立安国小学校長
	石　田　正　樹	留萌市立留萌小学校長
	佐　藤　聖　士	旭川市立緑新小学校長
	橋　本　展　晴	滝川市教育委員会指導参事
	志　田　雅　人	豊富町立兜沼小中学校教頭
監　　査	小　村　　　淳	札幌市立簾舞中学校長
	有　賀　智　哉	札幌市立元町北小学校長

令和3年度

北海道特別活動研究会事務局名簿

事 務 局 長	古　田　浩　章	札幌市立三里塚小学校長
事務局次長	鎌　田　哲　至	札幌市立前田北小学校教頭
	髙　川　靖　子	札幌市立東川下小学校
研 究 部 長	髙　橋　慶　之	札幌市立幌南小学校
副部長	桑　原　麻　衣	札幌市立桑園小学校
	山　田　了　己	札幌市立中央小学校
事 業 部 長	髙　川　靖　子	札幌市立東川下小学校
副部長	三　浦　綾　乃	札幌市立本通小学校
編 集 部 長	加　賀　大　介	札幌市立発寒西小学校
副部長	桑　原　好　恵	札幌市立厚別北小学校

【事務局】
札幌市立三里塚小学校
〠　００４-０８０２　札幌市清田区里塚２条６丁目７－１
℡　０１１－８８１－２４３７
FAX　０１１－８８１－３７６０

事務局長　古　田　浩　章

令和3年度

北海道特別活動研究会　支部役員名簿

	支部会長	副会長	事務局長
道南	深澤　昌明 （函館市立磨光小学校長）	須田　晃至（函館市立青柳小学校長）	須田　晃至 （函館市立青柳小学校長）
胆振	高見　恭介 （室蘭市立翔陽中学校長）		縣　　宏光 （登別市立鷲別中学校）
釧路	二瓶　明紀 （釧路市立新陽小学校長）	野口　育子（標茶町立標茶小学校長） 田中　敏行（鶴居村立鶴居小学校長） 照井　貴幸（釧路市立光陽小学校長） 小林　香織（白糠町立茶路小中学校長）	中島　範周 （釧路市立鳥取小学校）
後志小樽	日下部　匡彦 （小樽市立山の手小学校長）	堀　　智行（余市町立沢町小学校長）	鎌田　新平 （余市町立黒川小学校）
日高	神成　　浩 （新ひだか町立静内中学校長）	松田　拓美（新冠町立新冠中学校長）	阿部　秀智 （日高町立厚賀小学校長）
オホーツク	保科　浩則 （遠軽町立安国小学校長）	上野　弘一（訓子府町立訓子府中学校長） 飛澤　浩幸（斜里町立斜里中学校長） 澁谷　　順（湧別町立上湧別中校長） 齊當あけみ（紋別市立紋別小学校教頭） 神田　秀樹（大空町立女満別小学校教頭）	小中　理司 （北見市立美山小学校教頭）
留萌	石田　正樹 （留萌市立留萌小学校長）	酒井　康有（天塩町立天塩中学校教頭）	平野　清也 （留萌市立留萌小学校）
上川・旭川	佐藤　聖士 （旭川市立緑新小学校長）	鈴木　康弘（士別市立士別南小学校長） 五十嵐　徹（旭川市立春光小学校教頭） 薬師寺　要次（旭川市立東光小学校主幹）	齋藤　知尋 （旭川市立大有小学校教頭）
空知	橋本　展晴 （滝川市教育委員会指導参事）		多田　光次郎 （雨竜町立雨竜中学校長）
宗谷	志田　雅人 （豊富町立兜沼小中学校教頭）		志田　雅人 （豊富町立兜沼小中学校教頭）
札幌	北原　徹也 （札幌市立平岸西小学校長）	山本　祐司（札幌市立新陵東小学校長） 山下　尊子（札幌市立菊水小学校長） 小田　英人（札幌市立大倉山小学校長）	井田　　敦 （札幌市立本町小学校長）

開催地及び研究主題一覧

	大会名	開催日	研究主題および副主題（大会課題）
第１次研究	第１回 札幌大会	昭和４８年 １０月１２・１３日	○ひとりひとりを生かす特別活動 （小・中学校のそれぞれで副主題を設定した）
	第２回 札幌大会	昭和４９年 １０月１１・１２日	〃
第２次研究	第３回 網走大会	昭和５０年	○望ましい人間形成をめざす特別活動の目標をどのように達成したらよいか （小・中学校のそれぞれで副主題を設定した）
	第４回 渡島大会	昭和５１年	〃
	第５回 札幌大会	昭和５２年 １０月１３・１４日	〃
第３次研究	第６回 札幌大会	昭和５３年 ７月31日・８月１日	○児童・生徒がたくましく育つ学校づくりと特別活動 ～ひとりひとりが生きる集団活動の創造～
	第７回 釧路大会	昭和５４年 １０月２６・２７日	〃 ～ゆとりと充実のある学校生活をめざした特別活動～
	第８回 札幌大会	昭和５５年 １０月３・４日	〃 ～「確かめる」活動から「深める」活動へ～
第４次研究	第９回 胆振・伊達大会	昭和５６年 １０月８・９日	○人間性豊かな児童・生徒が育つ学校づくりと特別活動 ～ひとりひとりが育つ集団活動を見つめ直そう～
	第１０回 後志・余市大会	昭和５７年 １０月１・２日	〃 ～ひとりひとりが意欲的に実践する力を高める活動をめざして～
	第１１回 函館大会	昭和５８年 ９月30日・10月１日	〃 ～ひとりひとりが目的をもって実践しようとする態度の育成をめざして～
第５次研究	第１２回 札幌大会	昭和５９年 １０月２６・２７日	○人間性豊かな児童・生徒が育つ特別活動の創造 ～豊かな心とたくましい実践力を求めて～
	第１３回 旭川大会	昭和６０年 １０月２５・２６日	〃 ～正しく判断し、実践できる児童・生徒をめざして～
	第１４回 網走・遠軽大会	昭和６１年 １０月３・４日	〃 ～一人ひとりの自己実現を図る集団活動をめざして～
第６次研究	第１５回 空知・滝川大会	昭和６２年 １０月１６・１７日	○たくましく心豊かな児童・生徒が育つ特別活動
	第１６回 帯広大会	昭和６３年 １０月１４・１５日	〃 ～確かな実践力を育てる児童・生徒をめざして～
	第１７回 札幌大会 （全国）	平成元年 １０月５・６日	○２１世紀に生きる人間を育てる特別活動 ～たくましく心豊かな児童・生徒が育つ集団活動を通して～
	第１８回 釧路大会	平成２年 １０月１６・１７日	○たくましく心豊かな児童・生徒が育つ特別活動 ～新学習指導要領の趣旨の理解につとめ、その展開を求めて～
第７次研究	第１９回 留萌大会	平成３年 １０月１１・１２日	○２１世紀をつくる、たくましく心豊かな児童・生徒が育つ特別活動 ～自主的・実践的な活動を生み出す指導計画のあり方を求めて～
	第２０回 旭川大会	平成４年 １０月１５・１６日	〃 ～自主的・実践的な活動を生み出す指導法のあり方を求めて～
	第２１回 札幌大会	平成５年 １０月２２・２３日	〃 ～自分らしさを発揮し、仲間と共に創り上げる活動をめざして～
第８次研究	第２２回 函館・渡島大会	平成６年 １０月１２・１３日	〃 ～自らの力を高め、仲間と共に生き生きと取り組む活動をめざして～
	第２３回 胆振・伊達大会	平成７年 １０月１１・１２日	〃 ～自らの力を高め、仲間と共に生き生きと取り組む活動をめざす～
第９次研究	第２４回 帯広・十勝大会	平成８年 １０月２５日	○心のふれあいを深め、自己を生かした主体的な活動が展開される特別活動 ～仲間と共に学びあい、創り上げる喜びのもてる児童・生徒を求めて～
	第２５回 後志・小樽大会	平成９年 １０月１７日	〃 ～仲間との活動にひたり、確かな実践力を身につける児童生徒を求めて～
第１０次研究	第２６回 札幌大会 （全国）	平成１０年 １０月８・９日	○心のふれあいを深め、たくましく実践する力をはぐくむ特別活動 ～自己を高め、共に生きる喜びを実感できる集団活動をめざして～
	第２７回 空知・滝川大会	平成１１年 １０月２２日	〃 ～自己を高め、共に生きる喜びを実感できる実践活動をめざして～

第１１次研究	第２８回 網走・小清水大会	平成１２年 １０月１３日	○自己を生かして主体的に実践し、共に生きる力をはぐくむ特別活動 ～自分のよさを発揮しながら、仲間と協力して取り組む実践活動をめざして～
	第２９回 留萌・増毛大会	平成１３年 ９月２８日	〃 ～自己を高め、自他のよさを生かし合う実践活動をめざして～
第１２次研究	第３０回 札幌大会	平成１４年 １０月１１日	○自己の主体性と社会性をはぐくむ特別活動～自立と共生をめざして～ ～自己を確立し、仲間と協力して取り組む実践活動をめざして～
	第３１回 旭川大会	平成１５年 １０月２４日	〃 ～自己を生かしながら、仲間と創造的に取り組む実践活動をめざして～
第１３次研究	第３２回 釧路大会	平成１６年 １０月２９日	○仲間と共に高め合い、自己を見つめながら主体的に活動する力をはぐくむ特別活動 ～仲間と共に活動する楽しさにひたり、自己のよさを生かして主体的に活動する児童・生徒を求めて～
	第３３回 函館・渡島大会	平成１７年 １０月２９日	〃 ～仲間とのかかわりを強め、自己を見つめながら主体的に活動する児童・生徒を求めて
第１４次研究	第３４回 胆振・伊達大会	平成１８年 １０月２７日	○仲間との折り合いをつけながら主体的に活動し、存在感を味わうことができる特別活動 ～仲間と共に活動する楽しさにひたり、互いのよさを認め合いながら主体的に活動する児童・生徒を求めて～
	第３５回 後志・岩内大会	平成１９年 １０月２６日	〃 ～仲間とのかかわりを深め、自他のよさを生かし合いながら主体的に活動をつくり出す児童・生徒を求めて～
	第３６回 札幌大会 （全国）	平成２０年 １０月１７・１８日	〃 ～仲間とのかかわりを深め、自己を見つめながら共に高め合う活動をつくり出す児童・生徒を求めて～
第１５次研究	第３７回 網走・北見大会	平成２１年 １０月　９日	○自己の生き方についての考えを深めながら、よりよい生活や人間関係を築く力を高める特別活動～互いのよさを認め合いながら主体的に活動し、仲間と共に活動する楽しさにひたる児童・生徒を求めて
	第３８回 空知・岩見沢大会	平成２２年 １０月２９日	〃 ～自他のよさを生かし合いながら主体的に活動し、仲間とのかかわりを深めていく児童・生徒を求めて～
	第３９回 上川・旭川大会	平成２３年 １０月２８日	〃 ～自己を見つめながら主体的に活動し、仲間とのかかわりを深めていく児童・生徒を求めて～
	第４０回 札幌大会	平成２４年 １０月１９日	〃 ～自己を見つめながら共に高め合う活動をつくり出し、仲間とのかかわりを深めていく児童・生徒を求めて～
第１６次研究	第４１回 函館・渡島大会	平成２５年 １０月２５日	○主体的によりよい生活や活動をつくりあげ、望ましい人間関係を築く力を高める特別活動 ～活動づくりに進んで取り組み、仲間と積極的に関わり合う児童・生徒を求めて～
	第４２回 釧路大会	平成２６年 １１月　７日	〃 ～自己の役割を自覚しながら活動づくりに取り組み、仲間を共感的に理解し関わり合う児童・生徒を求めて～
	第４３回 胆振・室蘭大会	平成２７年 １０月２３日	〃 ～自他のよさを生かしながらよりよい活動づくりに取り組み、仲間を信頼し共に高め合う児童・生徒を求めて～
第１７次研究	第４４回 後志・ニセコ大会	平成２８年 １１月１８日	○よりよい自己や集団活動を目指して、共に知恵を出し合いながら主体的に取り組む特別活動 ～互いのよさを認め合いながら、主体的に活動し、仲間と共に活動をつくる楽しさにひたる児童・生徒を求めて～
	第４５回 オホーツク・網走大会	平成２９年 １０月１３日	〃 ～自他のよさを認め合い、生かし合いながら、主体的に活動づくりに参画する児童・生徒を求めて～
	第４６回 上川・旭川大会	平成３０年 １１月　２日	〃 ～より良い自他を目指して、互いに支え合い、高め合いながら、主体的に取り組む児童・生徒を求めて～
第１８次研究	第４７回 函館・渡島大会 （全国）	令和元年 ８月６・７日	○多様な他者と協働し、集団や社会に参画する力を高める特別活動 ～互いのよさを認め合いながら、共に活動をつくる楽しさを実感できる集団活動を求めて～
	第４８回 札幌大会	中止 （コロナ禍のため）	〃 ～互いのよさや可能性を発揮しながら、多様な他者と協働する楽しさを実感できる集団活動を求めて～
	第４９回 オホーツク・北見大会	令和３年 １０月１６日	〃 ～互いのよさや可能性を発揮しながら、多様な他者と協働する楽しさを実感できる集団活動を求めて～

北海道特別活動研究会規約

第１章　名称及び事務局

第１条　本会は、北海道特別活動研究会と称する。（略称　北特活）

第２条　本会の事務局は、事務局長の勤務校におく。

第２章　目的及び事業

第３条　本会は、全道の小学校・中学校における特別活動の研究を通して、その振興と会員相互の連絡をはかることを目的とする。

第４条　本会は、前条の目的を達成するため下記の事業を行う。

1. 特別活動の研究、成果の発表及び交流
2. 北海道特別活動研究会の開催
3. 機関誌の発行
4. 学習会、講演会等の開催
5. その他本会の目的を達成するために必要な事業

第３章　会　員

第５条　本会は、前条の趣旨に賛同し、入会を申し出た個人及び研究団体をもって構成する。

第６条　本会は、各地域ごとに支部を設けることができる。

第４章　役　員

第７条　本会は、次の役員をおく。
会長１名、副会長若干名、会計監査２名、理事若干名、事務局長１名、事務局次長若干名

第８条　会長、副会長、会計監査は理事会の推薦によって選出し、総会の承認を得る。

第９条　理事は各支部により若干名選出する。

第 10 条　事務局長、事務局次長は、会長在任支部より会長が委嘱する。

第 11 条　会長は、本会の事務を総理し、本会を代表する。

第 12 条　副会長は、会長を補佐し、会長事故あるときはその職務を代行する。

第 13 条　会計監査は、会計を監査し、その結果を総会に報告する。

第 14 条　役員の任期は１年とする。ただし再任は妨げない。

第 15 条　本会に顧問、参与をおくことができる。顧問、参与は、会長が委嘱する。

第５章　機　関

第 16 条　総会は、年１回以上開くこととする。

第 17 条　理事会は、総会に代わる議決機関であって、必要あるごとに会長が招集し、本会の事業遂行に関する事項を審議決定する。

第 18 条　理事会は、会計監査を除く役員で構成する。必要に応じて各支部より１名常任理事を選出し、常任理事会を設け、理事会にかえることができる。

第 19 条　本会は、会務執行のため、事務局を構成する。事務局員は、事務局長所在支部より会長が委嘱する。

第６章　会　計

第 20 条　本会の会員は、会費として年間 2,500 円納入する。

第 21 条　本会の経費は、会費及びその他の収入をもってあてる。

第 22 条　本会の会計年度は、毎年４月１日に始まり、翌年３月末日に終わる。

第７章　附　則

1. 本会の規約は、総会の議決により変更することができる。
2. この規約は、昭和 48 年３月２日に制定する。

（昭和 51 年 10 月 15 日一部改正、平成３年 10 月 11 日一部改正、平成 30 年 11 月 1 日一部改正）

第４９回北海道特別活動研究会
オホーツク・北見大会　研究紀要

発行年月日　　令和３年１０月１６日

発行責任者　　第４９回北海道特別活動研究会オホーツク・北見大会
大　会　長　　北　原　徹　也
（北海道特別活動研究会会長
札幌市立平岸西小学校長）
運営委員長　　保　科　浩　則
（オホーツク管内特別活動研究会会長
遠軽町立安国小学校長）

発　行　所　　北海道特別活動研究会
事務局（札幌市立三里塚小学校内）
〒００４－０８０２　札幌市清田区里塚２条6丁目７－１
TEL　０１１－８８１－２４３７
FAX　０１１－８８１－３７６０